

## 世界史の地殻変動と竹内好

松本健一

### I

二〇〇四年の秋のはじめ、ドイツのハイデルベルク大学で、竹内好・国際シンポジウム(九月六日～十日)が開かれた。ハイデルベルク大学日本学研究室とドイツ・日本研究所の共催で、テーマは「竹内好—アジアにおけるもう一つの近代化を考えた思想家？」である。

この国際シンポジウムは、三十年まえに亡くなった竹内好の思想的営みを国際的視野に引き出すという意味で、画期的なものだった。

わたしはシンポジウムの最終日に、『竹内好「日本のアジア主義」と現代』と題した講演(公開)をすることを要請された。要請してきたのは、ハイデルベルク大学のザイフェルト教授と、ドイツ・日本研究所の若い—わたしから見て—サーラ博士である。ザイフェルト教授は一九七〇年代はじめに日本に留学しており、そのときに竹内好という思想家を知り、わたしの『竹内好論—革命と沈黙』(一九七五年刊)も手に入れて読んだ、ということだった。

こういう因縁が三十年後にわたしのところに巡り返ってくるなどという事態は、二〇〇三年、『読売新聞』読書面の「時の葉」(六月八日付)で竹内好の『近代の超克』をとりあげたときには、とても予想できなかった。竹内好の思想を問題にするのも、私が最後の世代かな、と覚悟していたのである。

### II

その「時の葉」を、次に引いてみよう。

竹内好さんが亡くなってから、早いもので、すでに二十六年がすぎ去った。竹内さんと親しかった人々—橋川文三さん、井上光晴さん、谷川雁さん、丸山真男さん、埴谷雄高さん—みんなつぎつぎになくなってしまった。

わたしが竹内好さんの書いたものを読むようになったのは、大学に入ったばかりのころだが、学問的動機からではない。第一、学者になろうとはおもってもいなかった。それに、わたしが当時所属していたのは経済学部であって、竹内さんがかつて専攻した中国文学(魯迅もしくは郁達夫)とも、中国近代史(孫文や毛沢東)とも、余り関わりがなかった。

にもかかわらず、竹内好の文章を一つ残らず読むようになったのは、十代の終わりごろ、保田與重郎の“散華の美学”から必死に逃げだそうとおもったことがきっかけだった。戦後生まれのわたしが、戦後二十年ちかくもたって日本浪漫派の保田與重郎にいかれたのは、そのころわたしが「美しく死ぬことは可能か」と必死に問うていたからだろう。

戦時中の保田與重郎はこの問いに、「しかり、美しく死ぬことは可能である」と答えを与

えてくれたのである。「しきしまの大和心を人間はばと歌はれたやうに、花の美のいのちは、朝の日のさしそめる瞬間に、その永遠に豊かな瞬間に、終るものといふ」（「河原操子」昭和十四年）、と。

保田與重郎の文章は、十代の終わりごろのわたしに「美しく死ね」と教えていた。こういった甘い毒はながく精神に残影するものらしく、わたしが二十四歳のときに書いた処女作『若き北一輝』（一九七一年刊）をよんで、詩人の佐々木幹郎は「あれは夭折者の文体だ」と評したものだ。いまから三十年あまりもまえのことである。

わたしが夭折しなかったのは、口早にいつてしまえば、保田與重郎の同級生でもあった竹内好の文章を読むことによってだった。大東亜戦争の「聖戦の意義」に目ざめて、この「世界史の変革」のまえに身を投げだしていった若き日の竹内好（「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」）が、いかにしてその精神の死から回生してきたか。その精神史のドラマを辿ってみることによって、わたしは保田與重郎の“散華の美学”にいかれている状態から脱却していったような気がする。

だがその結果、新たな課題が生まれた。それは、竹内好とは何ものかという問いのみならず、かれが「近代の超克」という論文（『近代日本思想史講座』第七巻「近代化と伝統」一九五九年、所収）で問うていたアポリア(難題)にわたしも立ち向かわねばならない、ということであった。そのアポリアは、象徴的にいえば、大東亜戦争とは日本近代の思想にとって何であったのか、ということであるが、その問題を考えはじめたことが、わたしを思想史や精神史といった領域に引きこんでいったのにちがいない。

わたしはその問題意識にもとづいて、これまで二つの『近代の超克』と題した本を編んだ。一つは、昭和十七年の『文学界』における座談会「近代の超克」と竹内好の論文とを合わせた富山房百科文庫であり、もう一つは、竹内好のこの論文を中核にした筑摩叢書版評論集である。

この引用文を読んでもらえば、わたしが「竹内好の思想を問題にする」最後の世代かな、と覚悟していた真意のほども、おおよそ分かってもらえよう。

しかし、わたしがその時「時の栞」を書いた一年後の二〇〇四年になって、英語版と韓国語版の竹内好論文集―「近代とは何か」、「近代の超克」、「日本のアジア主義」など十数本を収める―が出版され、二〇〇五年にはドイツ語版と中国語版も刊行された。とすると、「竹内好の思想を問題にする」現在の国際的傾向を、たんに三十年まえの因縁に帰することはできない。

### III

何か竹内好を浮上させる国際的な潮流というものが存在するかもしれない。だいいち、これまで海外で日本の近代化＝西洋化を問題にするばあい、必ずといっていいほど取りあげられたのは、文明開化の提唱者である福沢諭吉であり、福沢を称揚してきた戦後民主主

義者の丸山真男だった。

ただ、二〇〇二年の末には、インドで「岡倉天心とアジア主義の百年」をテーマにした国際シンポジウムが開かれており、わたしはそこで竹内好のアジア主義と現在の「東アジア共同体」をめぐる構想にふれた発表をおこなっていた。福沢諭吉と丸山真男の近代化＝西洋化に対する、オルターナティブ(代案)としての岡倉天心と竹内好のアジア主義、という問題意識である。それに近い問題意識が、インド(アジア)のみならず、ドイツ(ヨーロッパ)にもこんにち存在しているのかもしれない。

そう考えると、EU統合の一方の主役であったドイツが、アングロ・サクソン主体の近代の世界史に対するオルターナティブとして、一方でヨーロッパの復権を考え、他方で竹内好の「近代の超克」論に注目しアジア主義の可能性を考えようとしているのではないだろうか。これは、イラク戦争を主導したアングロ・サクソン(米英)同盟とそれに反撥していったヨーロッパ(独・仏)の動きに見合った思潮ということもできよう。

#### IV

つまり、アングロ・サクソンが覇権国家として君臨した二十世紀の世界史に、冷戦が終焉したいま地殻変動がおこっている。その世界史の動きと連動するように、日本の近代化＝西洋化を推進した福沢－丸山の世界史に対する、岡倉－竹内という思想軸がせり上がってきたのではないだろうか。

もちろん、二〇〇四年秋の国際シンポジウムが明確にそのことを意識して企画されたというわけではなかったろう。シンポジウムでは、竹内好の思想を魯迅、中国、西田哲学、近代主義と民族、アジア主義といったさまざまな視覚から論じる、要素還元的な個別的思想研究の色合いも濃かった。にもかかわらず、竹内好の思想だけを対象に、五日間も論じ合うという機会は、日本だってこれまで一度もない出来ごとだった。

それに、ここに集まった学者たちは、ドイツ、オランダ、アメリカ、中国、韓国、そして日本(たとえば三島憲一・東京経済大教授、加々美光行・愛知大教授)であり、これをハイデルベルク大学の日本学研究生がきいている、という図は、数年まえはちょっと考えられない事態であった。

ともあれ、竹内好の「近代の超克」論——大東亜戦争における帝国主義「間」戦争とアジア侵略戦争という二重性格——や、「東洋の近代」は「抵抗するアジア」によって可能になる、といった仮説は、いま国際的視野のもとに引き出された。それが今後どのような波紋を描くことになるのか、わたしとしては楽しみに待ち構えているところである。

(『読売新聞』二〇〇四年十月六日付と、同二〇〇三年六月八日付に加筆、訂正を加えた。)